

翻刻「恐ろしき錯誤」草稿

〈解題〉

大阪の守口町に住んでいた二十七歳の江戸川乱歩は、大正十一（一九二二）年九月、「二銭銅貨」「一枚の切符」を書き上げた。十月、評論家の馬場孤蝶に送り、意見を求めた。しかし孤蝶は多忙ですぐには返信できなかったため、乱歩は作品を送り返してもらった。あらためて『新青年』編集長の森下雨村に送ったところ、作品の出来が認められる。「二銭銅貨」が、翌十二年四月号『新青年』掲載され、江戸川乱歩は探偵作家となった。

この時期の乱歩はまだ専業作家としてやっていくつもりはなかった。十一年十二月から、弁護士事務所勤務していた。

堂島の大橋弁護士事務所は、大阪アルカリ株式会社失権について扱っていた。乱歩の仕事は、『貼雑年譜』の書き込みによれば、「株主ノ苦情ヤ泣言ヲ聞イテ、相手ニ法律上

ノ支払義務アルコトヲ説明シテヤルコト」というものであった。

十二年五月に妻が腹膜炎にかかり、入院することになった。十年二月に生まれていた長男については「隆太郎ヲ寝サセルコトハ私ガヤツタ。夕食後隆太郎抱イテ近所ノ原ツパヲ散歩シ、唱歌ヲ歌ツテ歩キナガラ眠リツクノヲ待ツノデアル。ソシテソツト家ニ帰ツテ床ノ中ニ入レルノデアル。」といったような世話もしていた。

「二銭銅貨」などを書いていた、大正十一年七月から十二年六月までは、乱歩は父の家に住んでいた。同居していたのは、父、母、第二人と妹一人、乱歩とその妻、そして息子であった。六月末には、妻の退院とあわせて、乱歩と妻、息子の三人は、同じ大阪府北河内郡の門真村に移った。

弁護士事務所もこのときに辞め、七月に大阪毎日新聞の広告部に入っている。以前父が名古屋で経営していた平井商店の元店員の紹介によるものであった。月給のほかに歩合給も入る外交の仕事は乱歩に向いていた。弁護士事務所は百円から、八十円に月給は下がったが、歩合も合わせるのと五百円程度の月収になったという。この仕事は、専業作家となる決意をする大正十三年末まで続いている。

「恐ろしき錯誤」は十二年六月、妻の入院中に書かれてい

る。

「私の全作家生活を通じて、一番乗気になって、書きたくてたまらなくて書いたのは、恐らくこの作であったといつてもよいと思う。」

乱歩はこの作を「独りよがり陥って、実力の不足を曝露した」というように反省している。もう少し「よそ行き」の書き方をしなければならなかったというように、「ふだん着」の作品だったのである。

大正十二年九月一日、大阪の乱歩は地震の被害を受けることはなかった。しかし東京は壊滅的な状態であり、多くの出版社も被災した。日本橋の博文館も焼け、大部分の原稿も焼失した。『新青年』十月号はすでに印刷されていたので九月に刊行されたが、十月に出る十一月号は刊行が遅れた。十二月号は休刊になった。

「恐ろしき錯誤」はその十一月号「帝都復興号」に掲載されている。

実際の評価は不明だが、「恐ろしき錯誤」が掲載されたのは、震災で多くの原稿が焼けたため、偶然残っていたものを採用したのであろうと乱歩自身は考えていた。「森下氏に握りつぶされ、半年以上たった震災後の年末の雑誌にやっと発表になった」というように乱歩は書いている。そ

のため、次の作品にとりかかるのには時間がかかっている。

大正十二年と十三年の作品は五篇と少なかった。この後、十三年の末から書かれた「D坂の殺人事件」「心理試験」などによって乱歩は専業作家へと進むことになる。

「恐ろしき錯誤」の草稿は二種類ある。いずれも、これまでに紹介してきた「D坂の殺人事件」草稿や、「人間椅子」草稿などと同じ「EXTRAORDINARY」の大型封筒に入っていたものである。

この小説は、火事で死んだ女性の死因をめぐる、ひとりの男の葛藤を描いている。北川氏と野本氏という二人の男のあいだに、過去に一人の女性をめぐる競争があった。その女性、妙子は北川氏と結婚した。夫妻は子供と共に暮らしていた。北川氏の家が火事になるが、妙子はなぜか燃える家の中へ飛び込んで死んでしまう。北川氏は、その死に野本氏が関係していたのではという疑いを持った。北川氏に添った語りで進み、どこまでが真実で、どこからが思い込みなのか、あいまいなまま進んで行く。

草稿1に書かれているのは、ある作家のもとへ届けられた書簡ということになっている。そこには犯した罪の告白が書かれていると説明される。作家へあてた告白文という

形式はのちの「人間椅子」を想起させるが、この枠組みは「恐ろしき錯誤」では採用されなかった。登場人物の、中島豊彦と古林という名前は、北川と野本という完成稿とは異なっているが、妙子という女性の名前は同じである。

中学時代に同窓だったという中島は、高校以降の経歴を語る。高校を中退して遊民のような生活をしていたという。そして自らが罪を犯したという告白に入っていく。大きな罪を犯したということは繰り返すべられるが、草稿ではその罪の内容にまでは触れていない。妙子をめぐって、古林という友人と競ったことが描かれたところで、原稿は切れている。

草稿2では、書簡ではなく、友人の話ということになっている。レストランで三四人が無駄話をしているなかで、友人のひとりが語った話である。友人の話は、エドガー・アラン・ポーにも触れ、人が発狂するというのはどうということなのか、という抽象的な説明から始まる。完成稿では、ポーの名は記されていないが、北川氏が興奮して歩く様子の説明に「黄金虫」のエピソードが引用されている。

続く原稿に「恐ろしき錯誤」というタイトルが書かれているので、先の説明はこの段階で捨てられることになったのかもしれない。野本氏の家から、北川氏が出てくるとこ

ろから始まるのは、発表された小説と同様である。

こちらの草稿は先のものより修正が多く、読み取り難くなっているが、内容は発表されたものに近い。北川氏と野本氏の対面がどのようなものであったか説明が書かれ、さらに彼らの妙子をめぐる過去へとさかのぼっていく。

発表された小説は「勝ったぞ、勝ったぞ、勝ったぞ……」という北川氏の意識から始まる。野本氏の家を出た北川氏は、勝利を味わいながら、あてもなく街を歩く。そこからそのすぐ前の対面が説明される所までは草稿2と同様の構成である。草稿では、以前の恋の話へと移るが、完成版ではその前に北川氏の家が火事になったという説明がなされる。

二つの草稿が残されていることにより、乱歩が作品をつくりあげていく際に、物語の枠に工夫をして、いくつか試していたことがわかる。乱歩の作品制作の過程が見える、貴重な資料である。

落合教幸

(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
 何れも何れも不念の憂き目を繰り返
 した上、危も角も高等学校に入學し
 併し入學し、折角と重荷を卸した様な
 密函の様に、探せば探す■だけ、あとから、あとからと、
 田舎もろく、私をすうかりス掛けたら、
 ぬいぬいした。箱根細工の秘密の
 せしめ、あとかう、あとかうと、
 い内食者の「臆」をつぶす様なものが飛び出して
 来る、あの都会のクラクリ仕掛け■が、「腕白者で、」世間
 知らずの腕白者を、グロテスク好みの「アブノーマルな
 「譯知り」に一変させて了ひました。
 そんな訳で、折角苦心して入學した高等学校も途中で退
 学して了ひ、勤勉だった先祖の御蔭で、その日の糧には困
 らない身の上を幸ひの、立派な遊民になつて了つたのでし
 た。押しも押されもせぬ不良青年になつて了つたのでし
 た。
 私がさうして一人前の不良青年になる為に心身を浪費し
 てゐる間に、あなたは、中学時代から「もう」芽ばえの
 見えてゐた■藝術的天分を「」培ひ培ひして行かれた様で
 す。そして今日では前途ある新進作家として、「文壇の一方
 に重きを為して」既に立派な文壇的地位を築き上げられた
 のです。あなたの方では、この突然の「私の」手紙を御受
 取りになるまでは、私といふ一腕白少年の行末などについ

2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20

この程を世間の地位の抑えを保持し、と云ふ
 大いのことさう、ソカに女々しい所も、
 二人を争ひて書ソ、淫道と云ふやうと
 ば有りません。いふか、つゝいひしやう。
 私は今、ヤウ何と解さるゝ、い、かゝる女
 性、普通の人間の心や性格もあつた程分
 解し、いふやうに、いふやうに、唯心
 づゆい、とソウいふやうには、この私の心持
 解し、いふやうに、いふやうに、いふやうに
 は、今、いふやうに、いふやうに、いふやうに

のいふ。若くは、あつた人加、短勝し、
 非悪夢の中の、一、動然う、い、夢夢と、
 するの心す。白晝の悪夢、一、
 ぞか、いん、耐え難いことか、
 何ん、あつたか、加、い、い、
 なる、い、い、い、い、い、
 何ん、い、い、い、い、い、
 知の、い、い、い、い、い、
 何ん、い、い、い、い、い、

生涯続く悪夢、それがどんなに耐え難いことか、「とてもあ
 な」如何にあなたが豊かな想像力を御持ちになつてゐたつ
 て、逆もこの私の苦しみは御分りにならないでしやう。

私は大泥棒です。私は人殺しです。いや、私の犯した罪
 は、泥棒だとか人殺しだとかいふ様な、そんななまやさし
 い罪ではないのです。「罪を犯したのなれば、其筋へ自首し
 て来るがい、」昔から冷静なあなたは、たちどころにかう
 仰有るでしやう。なる程世の常の罪なれば、服罪すること
 によつて、割合簡単に心を安んずることも出来ます。併し
 私の場合は服罪するしないなどは問題でないので。そん
 なことはどうだつて、かまはないのです。

私は確かに「人殺し以上」の罪悪を犯してゐます。でも、
 それは■どんな名判官だつて■断罪することの出来ない
 様な種類の罪なんです。第一、髪の毛一本程の證據「だつ
 て」もないのです。強いて服罪しやうと思へば、私はこれ
 くの罪を犯したのですと、可也の困難を■「排」して自か
 ら主張する外には方法がないのです。ある時私は心の痛みに
 耐え兼ねて、實はそれを試みて見ました。私の罪状の逐
 一を認めて、検事局に送つたのです。併しそれは徒勞でし
 た。定めし検事局の御役人達は、私の心を籠めた告白書を、
 狂人のたはごとくとも思つたのでしやう。何の反應もあり

姿は

古林妙子の家に寄寓して大学の進んでゐる
 古林と申すとすう書生連の一団也、勿論妙子
 を見送さうと思はれりませぬ。此の頃、
 もうおれが学校を退学して、かろく遊んでゐ
 たる心算なりと、古林の元のまゝとて、
 かく、前掲の連中に入り、寧ろ妙子と
 するが、おれは目的、古林のまゝに入らぬ
 ための心算。最も堅く古林と別れ、
 妙子とせし四人ありませぬ。古林は
 と言へば、その場のりも、
 型を弄して、
 とソノのりも、
 然るに、
 抱き、
 与うません。

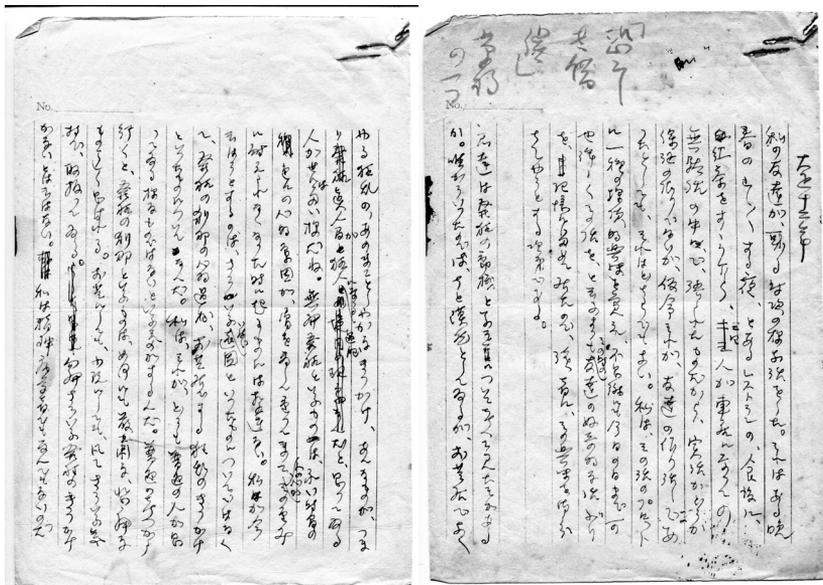
古林はどちらかと云へば、その頃からもう「後年の」一種の変人型を示して、「おましたので、」それ程面白い友達といふのでもなかつたのですから、親しげに彼を訪れる私共四人の心持を割つて見れば、實は随分「可也」浅間しいものだった「のです。」と云はねばなりません。

私の外の三人といふのは、武田と小森と内山とで、皆料こそ違つておましたけれど、古林と同じ大学の学生でした。この三人については夫々面白いエピソードもないではありませんが、「この」「私が茲に御話しやうとする」事件には、彼等はほんの端役を勤め「てゐる」に過ぎないのですから、唯だ名前を記す位に止めて「置きましょう。」あ「ま」り深入りしないことにしませう。

さて、その四人に、古林を加えた私共の一団は、いづれ劣[■]らず妙子を思つてゐたには相違ないのですが、そして、お互に云はず語らずの間に、お互を恋の競争者として、心の内では随分反目し合つても居たのですが、誰一人それを色に現はすものはないのでした。妙子の方でも、人並以上に敏感な彼女のことですから、我々の心持を充分察してはゐたのでしやうが、殊更ら誰に厚く誰に薄いといふことはなく、唯まんべんなく、つ、ましやかに愛嬌を見せてゐるに過ぎませんでした。そして、そのことが、尚更ら

併し、運命の女神は唯ひと時私に笑顔を見せたばかりで、アツと思ふ間に、あらぬ方「を」に振向■いて了ひました。神様は多分私の様な不良少年に、かくも純潔な恋を許すのは、ふさはしくないとでも思召したのでしやう。所詮は恵れぬ運命でした。「その最初はこうなんです。」何といふ呪はしい回り合せだったのでしやう、

そのことがあつてから二三日たつて、私は思ひもよらぬ病気に「急性の腸チブスといふ大病に」見舞はれたのでした。「医者は腸」「といふ医者の見立てに、電報によつて國元の母親が上京する、非常な発熱で前後も知らなかつた私はいつの間にか病院に擔ぎ込まれてゐる、熱は下つたかと思へば又」



草稿2

大正十二年

私の友達が、或る時次の様な話をした。それはある晩春のむしくする夜、とあるレストランの、食後に、■紅茶をす、り乍ら、「二三」三四人が車座になつての無駄話の中で、語られたものだから、実話かどうか保証の限りでないが、仮令それが、友達の話であつたとしても、それはどちらでもよい。私は、その話のプロットに一種の探偵的興味を覚え、不思議にも今日の日まで可也詳しくその話を、と云ふよりも〔その時の〕友達の好奇的な話ぶりを、■記憶に留めて居たので、読者に、その興味を御分ちしやうとする次第である。

君達は発狂の動機といふことについて考へて見たことがあるか。唯かういつたのでは、ちと漠然としてゐるが、お芝居でよくやる狂乱の、あのまことしやかなきつかけ、あんなものが、つまり「発狂」眞人間が「と」狂人になる過程「との境目の現象なん」だと、思つてゐる人が世には多い様だね。無論発狂といふものは、永い時間の■色々々の心的原因が、層を為して重つて来て、「人の心が」その重みに耐えられなくなつた時に起るものには相違ない。私「は」が今

「■■である」女房といふものは、ある時分は邪魔な様でも、さてゐなくなつて見ると「実際」■■に「困るもの」だ。殊に僕のように子供が残されちや、仕末にいけない。僕も近頃可也へこたれてゐるよ」

「…」

「併し、火事といふ奴は恐ろしいものだ。：

…火事だといふ呼び「声で」フツと目を覚すと、もう隣りとの「境の」壁のすき間からフス／＼煙が出てゐるんだらう。随分面くらつたよ。ほんとうに何を考へる暇もなかつたんだから■■な。よく一つ嘸に、お婆さんが、火事だといふので■■あはて、了つて、米びつの前へ行つて、丹念に米を計つては櫃の中へ入れてゐたつて、いふ話があるが、ありそふ

如何な不良少年にもほんとうの恋はあり得るものです。「その恋がほんとうであればある程、肉の汚れを厭ふのではないでしやうか」場数者を持つて任ずる私が、「その時計りは如何に」■■「はせん」妙子に対して丈けは、それ迄に幾度となく「繰り返した」「隠し持つてゐた」あの恋の最初の言葉を囁くにさへ気後れして、見苦しい程絶句したり、生れてから始めて腋の下に冷い汗を流したり、手を握らうとしても指先の感覚が麻痺した様になつて、思はず彼女の

柔い皮膚に爪を立てたり、その他様々の失態を演じたといふのは、一体どういふ訳なのでしやう。それは、私の恋がどんなに純真であつたかといふことを雄弁に物語るものではないでしやうか。

「それまでの私であつた■■ら、かうして女の心を確めた時、」■■その以前の数々の経験によれば、かうして女の心を確め得た時、私は必ずペロリと赤い舌を出して「「こいつも俺のえじきになるのか、可愛相に」など、「女なんてモロイもんだなあ」■■ど、」自分の腕前を自惚れたものですが、妙子の場合全然違つてゐました。「彼女は」彼女の前に出ては自分なんてものは、殆どあるのかないのか分らぬ位でした。「無」私の愛—少し言葉はふさはしくありませんが、まあさういつた感じでした。私の頭の中には、活動寫眞の大寫しの様に強い光りで輝いてゐる妙子の顔「の外には何も無いといつてもいい、のでした。」がある計りで他の色々の■■意識は、何様の意識さへも、恰度活動寫眞の見物席の様に薄ぼんやりとあるかなきかにぼかされて了ふのでした。

「それ程に打込んだ、」

先を急ぎますので、私の「当時の」心持を充分御傳へしてゐる暇がありませんが、詩人としてのあなたが出来る限り

の想像力を以て、世界中で一番「純真な」■、一番熱烈な、「一番」一番深刻な恋を心に描いて下さるならば、それこそ妙子に対する私の恋だったのです。妙子「を知つから」の心を知るまでに私はどれ程■苦「しみを経験」悶したことでしやう。そして妙子の心を知つ「てから、私はどれ程の」た時、私は「如何に■」どんなに深い身も世もあらぬ■歡喜

を味つたことでしやう。古来のあらゆる文学に現はれたあらゆる恋人「にもまして」

「苦しみも喜び」も、私のそれに比べては物の数ではないのです。